

2022年2月8日

2022年3月期 第3四半期連結決算電話会議 内容説明スクリプト

I. 全般概況

本日発表いたしました当社2022年3月期第3四半期連結決算の概要についてご説明します。決算短信の表紙サマリーをご覧ください。

1. 2022年3月期 第3四半期連結決算 業績概要

1) 当年度第3四半期連結累計期間の経営成績

- ① 売上高 9,225億円 前年同期比2,673億円の増収
(売上総利益 1,809億円 前年同期比807億円の増益)
 - ② 税引前利益 1,954億円 前年同期比1,308億円の増益
 - ③ 四半期利益 1,809億円 前年同期比1,340億円の増益
 - ④ 親会社の所有者に帰属する四半期利益1,701億円 前年同期比1,247億円の増益
- と、前年同期間に対して増収・増益となりました。

2) 第3四半期連結決算の概況

当年度第3四半期連結累計期間の決算概況をご説明いたします。

[第3四半期連結決算 業績概況 前年同期比較]

① 連結売上高

《金属価格、為替相場》 決算短信添付資料の2ページをご覧ください。

銅価格は、上昇基調で推移した後、新型コロナウイルスの変異株の感染拡大による需要減少などを受け下落傾向に転じましたが、供給懸念などによりその後は上昇する局面がありました。ニッケル価格は、世界経済の回復基調などを背景に上昇基調で推移しました。金価格は、変異株の感染拡大による景気回復への懸念などから上昇基調で推移したものの、米国経済の回復などから下落基調に転じ、その後は概ね一定水準で推移しました。この結果、当第3四半期連結累計期間の銅価格は9,593\$/t、ニッケル価格は8.51\$/lbと、いずれも前年同期間を上回り、金価格は1799.9\$/tozと前年同期間を下回りました。平均為替レートは111.11円/\$と、前年同期間と比べ円安になりました。

《売上高》

当期間の連結売上高は、銅およびニッケル価格が前年同期間を上回ったことなどにより、前年同期間に比べて2,673億円増収となる、9,225億円となりました。

② 連結税引前利益、四半期利益、および親会社の所有者に帰属する四半期利益

増収に加え、銅価格の上昇などにより持分法による投資損益が好転したことなどから、前年同期間と比べて、税引前利益は1,308億円増益の1,954億円、四半期利益は1,340億円増益の1,809億円、親会社の所有者に帰属する四半期利益は1,247億円増益の1,701億円となりました。

3) トピックス

当年度第3四半期連結累計期間におけるトピックスについてご説明します。生産量については、決算補足説明資料の7ページをご参照ください。

① 海外銅鉱山

《モレンシー》

新型コロナウイルスの感染症拡大の影響を踏まえて一部のミル（鉱石粉碎装置）の操業度低下策を実施していることなどから、当期間の生産量は前年同期間を下回り、296千トンとなりました。

《セロ・ベルデ》

当期間の生産量は294千トンと、新型コロナウイルス感染症拡大への対応で一時的に保安操業措置を実施した前年同期間を上回りました。

② タガニート HPAL

上期のボイラー設備トラブル、および12月の台風22号による停電などにより、生産量は前年同期間を下回りました。

③ CBNC（コーラルベイ）

新型コロナウイルス感染症の影響で9月に一時的に操業度を低下させたこと、および一部資材の不足の影響などにより、生産量は前年同期間を若干下回りました。

④ 材料事業

電池材料において一時的に需要が低迷した前年同期間と比較し需要が増加していることに加え、粉体材料において好調な需要が継続したことなどにより、材料事業セグメントの当期間の売上高は、前年同期間と比べて530億円増収の2,037億円となりました。セグメント利益は、前年同期間に対して153億円増益の、203億円となりました。

2. 2022年3月期 通期連結業績予想（11月予想比較）

昨年11月に通期の連結業績予想を見直し公表しておりますが、今回も年度累計業績予想の見直しを行いました。決算短信の表紙サマリー下段、および決算補足説明資料の1ページ下段をご覧ください。

1) 売上高および損益

今回、2022年3月期の通期の連結業績予想を以下のとおり見直しました。

- ①売上高 1兆2,110億円、11月予想比360億円の増収
(売上総利益 2,300億円、11月予想比320億円の増益)
- ②税引前利益 3,140億円、11月予想比480億円の増益
- ③親会社の所有者に帰属する当期利益 2,480億円、11月予想比340億円の増益

業績予想の前提となる金属価格および為替は、決算短信添付資料の 5 ページならびに決算補足説明資料の 1 ページ下段に記載のとおりです。年度平均の金属価格は 11 月予想を上回る水準となり、年度平均為替レートも 11 月予想に対して円安で予想しております。

2) トピックス

連結業績予想におけるトピックスをご説明します。生産量については、決算補足説明資料の 7 ページをご参照ください。

①シエラゴルド銅鉱山に係る全権益保有持分譲渡の影響額

譲渡の実行が 2022 年 3 月末までに完了することを前提とした影響額を、11 月予想では約 700 億円と想定しておりましたが、今回これを約 740 億円に見直して税引前利益に織り込んでいます。40 億円増額となった主要因は為替の影響によるものです。なお、この金額はあくまでも業績予想作成時点での見積もりに基づき計算した想定額であり、確定されたものではありません。

②海外銅鉱山

《モレンシー》

新型コロナウイルスの感染症拡大の影響縮小とともに、4 月から採掘量のランプアップを行っており、加えて、2022 年に再開予定であった選鉱場を 7 月に処理能力 50% で再稼働させています。例年よりも勢力が強く長期化したモンスーンの影響で、7 月から 9 月にかけてランプアップが一時期低調になりましたが、10 月以降は徐々に採掘量が回復し、年間の生産量は、ほぼ 11 月予想並みの 398 千トンと見込んでおります。

《セロ・ベルデ》

新型コロナウイルスの感染症拡大による影響を踏まえた年間計画に基づき、順調に操業を継続しておりますが、品位が低下傾向にあり、それを処理量でカバーする操業を続けています。年間の生産量は、ほぼ 11 月予想並みの 399 千トンと見込んでおります。

《カンデラリア》

露天掘り採掘箇所が存在する断層によるピット崩落の予防措置のために採掘が遅延し、パートナーの Lundin mining 社は 6 月に年間生産量ガイダンスの下方修正を発表しています。ピットの安定性確保対策とモニタリングを継続しながらの操業となることから、11 月予想の年間生産量は 107 千トンにとどまると見込みましたが、ピットの安定性確保策の影響が緩和され、今回予想の年間生産量は 116 千トンと、11 月予想に対しては増産となる見込みです。

《シエラゴルド》

シエラゴルドについては、第 3 四半期から持分法の適用を中止しております。

③タガニート HPAL

第 1 四半期に発生したボイラー設備トラブルによる減産影響は 11 月予想に織り込んでいましたが、12 月の台風 22 号による停電トラブルなどにより、年間の生産量は 26.1 千トンと、11 月予想に対して 1 割程度の減産となる見込みです。

④CBNC (コーラルベイ)

新型コロナウイルス感染症の影響による 9 月の一時的な操業度低下は 11 月予想に織り込んでいましたが、一部資材の不足等により、年間の生産量は 11 月予想を若干下回る見込みです。

3. 配当

配当についてご説明いたします。

決算短信の表紙サマリー、および本日公表しました「2022 年 3 月期（第 97 期）配当予想の修正に関するお知らせ」をご覧ください。

今回、通期連結業績予想を見直したことにより、期末の配当予想の見直しを行いました。

今回の通期連結業績予想には、2022 年 3 月末までにシエラゴドルダ権益譲渡の実行が完了すると想定し、権益譲渡に関する一連の手続きの影響額を含めております。しかし、当該権益譲渡の実行日が現時点では未定であるため、期末配当予想の算定に際しては、シエラゴドルダ権益譲渡に関する一連の手続きの影響額を除いたうえで、連結配当性向を 35%以上としております。

その結果、期末配当の予想については、前回発表予想の一株当たり 71 円に対して 38 円増配し、109 円に修正することといたします。一株当たりの年間配当金は、過去最高の 222 円となる予定です。

なお、シエラゴドルダ権益譲渡に関する一連の手続きの影響額には、改訂 IAS 第 28 号「関連会社及び共同支配企業に対する投資」の適用に伴い、累積的影響額として 2019 年度に利益剰余金期首残高で調整した Sierra Godra S. C. M. への貸付金等に対する貸倒引当金の戻入益に相当する金額が含まれております。

この戻入益相当額は、貸倒引当金を認識した際に、累積的影響額であるため 2019 年度の損失計上ではなく利益剰余金を減らす期首調整として計上しており、損益勘定（PL）を通していないことから、今後の譲渡実行日が確定した以降に開示する配当予想の算定には含めないこととし、これを除いたベースで、当社の株主還元方針である連結配当性向 35%以上を維持してまいります。

II. 売上総利益、セグメント利益の内訳他の詳細

それでは、決算補足説明資料をご覧ください。

ポイントとなる部分のみご説明いたします。

1. 1 ページ 決算・予想比較

1) 2021 年度第 3 四半期決算 vs 2020 年度第 3 四半期決算

1 ページ目上段の表が当年度第 3 四半期累計決算と前年同期実績との比較となります。

表の脚注の記載【前年同期比較①－②】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益前年同期比 1,308 億円増益の大部分を占める相場要因好転 1,170 億円以外の主な

項目をご説明します。数量差については、主に前年同期比減販の菱刈、THPAL、モレンシーなどで悪化し、トータル 55 億円の悪化となりました。コスト差については、シエラゴルダが第 2 四半期までの実績で大幅な好転となった一方で、前年同期比減産の THPAL、CBNC、モレンシーの他、カンデラリアやセロ・ベルデなどで悪化し、トータル 115 億円の悪化となりました。QB2 建設中 断コスト+63 億円は、前年同期に計上した当該費用計上が今期無いことによる一過性要因です。その他の+20 億円には、未実現利益や副産品・硫酸等の好転影響等が含まれています。

2) 2021 年度通期業績予想 (2 月予想) vs (11 月予想)

次に、1 ページ目下段の表は、今回見直した業績予想と前回 11 月公表予想との比較となります。表の脚注の記載【新旧予想比較④-⑤】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益前回予想比 480 億円増益の要因のうち、相場要因好転 324 億円と、シエラゴルダ 権益譲渡の影響額の見直しによる好転 40 億円以外の主な項目をご説明します。数量差については、THPAL、モレンシーなどで前回予想比減販に伴う悪化を見込むことにより、トータル 38 億円の悪化と予想しています。コスト差については、モレンシーやカンデラリアなどでコスト単価差の好転を見込む一方で、THPAL、CBNC などで前回予想比減産に伴うコスト単価差の悪化を見込むことなどによりトータル 25 億円の悪化と予想しています。材料事業は電池材料事業で金属価格 上昇による建値差の好転を見込むことなどにより 50 億円の好転と予想しています。その他の+ 109 億円には、相場要因や材料に含まれない持分法会社の損益増減や副産品・硫酸等の好転影響 等が含まれています。

2. 3 ページ セグメント別対前年同期実績比較 (売上総利益増減)

3 ページ セグメント別の前年同期比較をご覧ください。

資源セグメントの売上総利益は 677 億円と 244 億円の増益となりました。ページ中央の増減説 明に記載のとおり、海外銅鉱山・主にモレンシーの銅価格上昇に伴う価格差好転が主な要因で す。

製錬セグメントの売上総利益は 817 億円と 397 億円の増益となりました。下段の増減説明のと おり、銅系で 184 億円、ニッケル系で 178 億円の好転となりました。主な要因として、ニッケル 系の価格条件差がニッケル・コバルト価格上昇により大きく好転した他、銅系・ニッケル系とも 在庫評価で好転しました。その他についても、銅系は硫酸等の好転影響等、ニッケル系は為替の 影響等により、それぞれ好転しました。

3. 4 ページ セグメント別対前年同期実績比較 (材料事業の製品群別売上高)

4 ページ上段、材料事業の製品群別売上高のうち、電池材料の売上高については、前年同期から の需要回復・増加を背景として 294 億円増収の 964 億円となりました。粉体材料については、好 調な需要の継続を背景として 134 億円増収の 398 億円となりました。

4. 4 ページ セグメント別対前年同期実績比較 (持分法投資損益)

4 ページ中央、持分法投資損益については、前年同期比 413 億円増益の 410 億円となりました。 セロ・ベルデは、前年同期に対し増産・増販となったことや銅価格上昇により前年同期比 158 億 円増益の 186 億円となりました。シエラゴルダは、第 3 四半期から持分法の適用を中止しており、

当期間の損益は第 2 四半期までの実績となりますが、第 3 四半期累計では前年同期比 150 億円増益の 82 億円となりました。

5. 5 ページ セグメント別業績予想比較 2021 年度予想 (2 月) vs (11 月)

5 ページをご覧ください。

今回見直した通期業績予想を前回 11 月公表予想値と比較したものです。業績予想の数値は 10 億円単位の丸め数字で記載しています。

資源セグメントの売上総利益は 910 億円と 80 億円の増益と予想しています。ページ中央の増減説明に記載のとおり、海外銅鉱山・主にモレンシーの銅価格上昇に伴う価格差好転とコスト単価差の好転が主な要因です。

製錬セグメントの売上総利益は 1,000 億円と 130 億円の増益と予想しています。下段の増減説明のとおり、銅系は 86 億円、ニッケル系で 26 億円好転の予想です。主な要因としては、ニッケル系で THPAL、CBNC などの減産・減販に伴う数量差、コスト単価の悪化を見込む一方で、ニッケル系の価格条件差、銅系・ニッケル系の在庫評価で大幅な好転を見込んでいます。

6. 6 ページ セグメント別通期業績予想比較 (材料事業の製品群別売上高)

6 ページ上段、材料事業の製品群別売上高について、材料事業全体の売上高は前回予想比 10 億円増収の 2,760 億円と予想しています。

電池材料は、総じて堅調な生産・販売を継続していることに加え、金属価格上昇の影響などにより前回予想比 40 億円増収の 1,340 億円と予想しています。粉体材料は、前回予想を若干下回る 510 億円と予想しています。

7. 6 ページ セグメント別通期業績予想比較 (持分法投資損益)

6 ページ下段の持分法投資損益については、5 億円刻みの丸数として表示しています。

セロ・ベルデは銅価格上昇等により 20 億円の増益、カンデラリアは銅価格上昇に加え前回予想比増産・増販による数量差コスト差の好転を見込むことから 25 億円の増益と予想しています。持分法投資損益全体としては、前回予想比で 70 億円増益の 530 億円と予想しています。

以上